



開設10年を機にリニューアル

2015年は、戦後生まれのいわゆる「団塊の世代」(1947〔昭和22〕～49〔昭和24〕年生まれ)と呼ばれてきた人たちの全員が65歳を迎える。

新たな幕が開く。

2003年に開設したグループホーム、デイサービス、ショートステイで構成する北海道の介護事業所が、昨年10月に開設10年を機に大改装、プログラムも刷新してリニューアルオープンした。

転期に立つ経営の視座②

第二創業に取り組む意識

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

昨年6月18日に「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」(略して「医療介護総合確保推進法」)が成立し、同月25日に公布したことで、過去に改正した介護保険法が再度改正され、4月から第6期事業計画としての

その理由を「介護保険制度ができて15年。利用者の生活スタイルが大きく変わろうとしている。今後入ってくる利用者のニーズに対応していくため、生活しやすいスタイル、暮らしやすい環境に形を変え、必要を感じ、第二創業に取り組む意識でリニューアルに着手

した」と説明した代表は、「職員の質の向上が伴う必要があると、自ら企画した勉強会を主体的に開催するようになった」と、思わぬ効果に目を細くしながら語った。

第6期を第二創業の時とらえ、利用者の主流を占める団塊の世代への対応を見据えたりリニューアルを行ったトップの覚悟と決意から学ぶべきことは少なくない。

紺屋の白袴

全国には、開設から10年以上経過した1万余のグループホームが点在し、その多くは建物の維持管理、とりわけ各種の配管類はメンテナンスを伴う時期に入った。

浴槽やトイレ、洗面、キッチン、雨樋などの水回り、サッシ、ドアノブ、天井や床下などの不具合を放置してはいないだろうか。

スプリンクラーを含めた防災設備の設置を終えたのも束の間、建物全般の経年劣化を見込んだ大規模な修繕計画が避けられない。

家庭的な雰囲気を大事にしてきた入居者、特に主婦としての経験を育んできた人にとって、リビングとダイニングは欠かせない。

極論すれば、「リビングとダイニ

ングの配置こそが、グループホームにおける認知症介護のメカニズムである」といって過言ではない。

だが、開設当初の入居者のライフスタイルは、世代の交代によって変わりつつある。

リビング・ダイニングを中心とした設えから、将来の入居者像を見据えて「ラウンジへの転換」へとリフォームに踏み切るのも、一つの選択肢である。

この際、お座なりにしてきた職員の更衣室や休憩スペースなど、バックヤードを見直したい。

利用者のことにばかり忙しく、職員のことには気が回らない。

職員への対応は、「紺屋の白袴」といっても過言ではなからう。

更衣室(特に女性専用化粧室・パウダールーム等)の設置と専用ロッカー、姿見、シャワールームの整備に加えて、プライパシーやセキュリティ対策は、職員確保と処遇の見直しを検討するうえからも、改善すべき必須条件である。

リニューアルされた事業所も、この点への投資は怠りなかった。

ES(Employee Satisfaction)の視点からも、放置したままであってはなるまい*。

*: 本誌2015年2月号本欄参照